



東日本大震災被災地における
第 3 回ボランティア活動報告
「絆・ベルリン」

報告の第二部

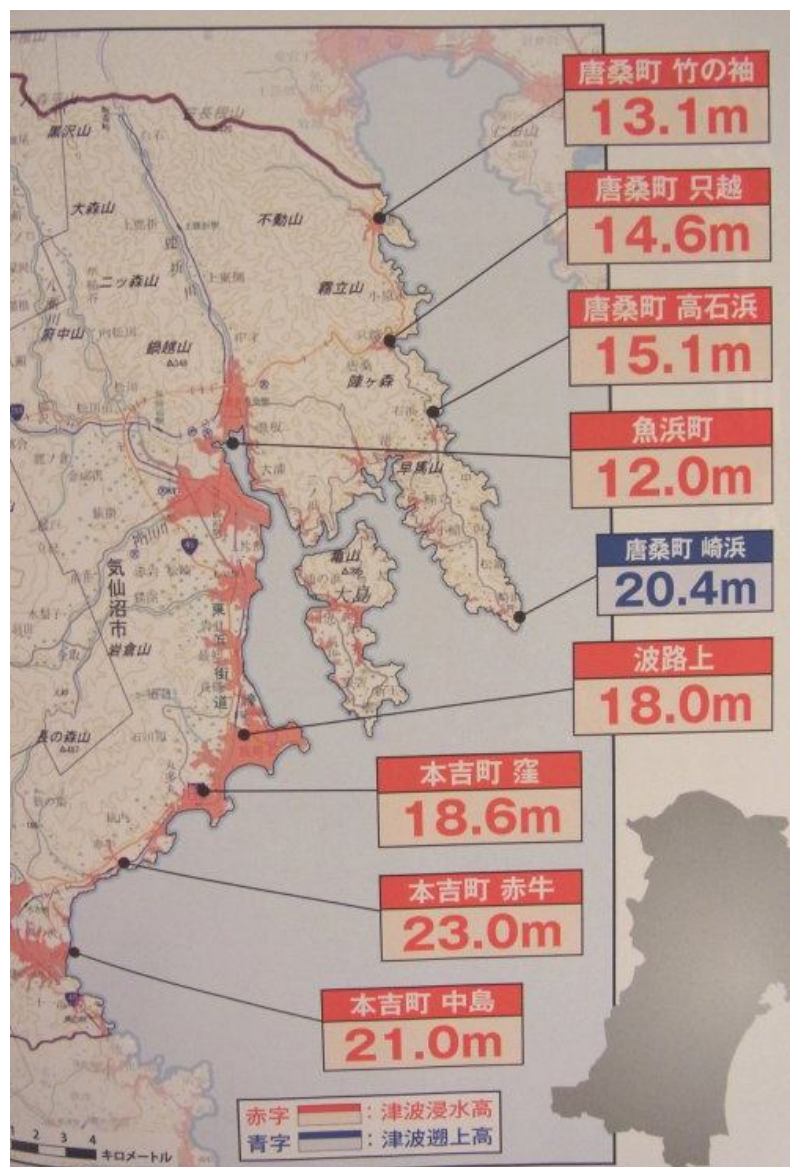
Dr. Frank Brose

絆・ベルリンの副会長

10月15日（月曜日）

早朝、4台の車で陸前高田を経て気仙沼にきました。初めて、宮城県でボランティア活動をしました。東日本大震災による大津波により、気仙沼市も大きな被害を受けました。気仙沼市だけでは、死者983人、行方不明者446人になりました。住宅被害は、全壊8492棟、半壊は2259棟でした。避難所は、52ヶ所で、2308人の避難者が避難所で生活しています。

気仙沼市本吉町の平磯では高さ23mの津波で水浸しになりました。リアス式海岸にあるフィヨルド性の気仙沼湾では、最大水流速度が10 m/secに達していました。湾のおわりに位置する気仙沼の港では高さの12m津波が海岸から2キロ半内陸まで氾濫しました。大災害後、気仙沼市では原油の流出で火事が起きました。消火作業が4日間かかりました。6人の消防士が亡くなってしまいました。



大被害なので、気仙沼のボランティア・センターは今でも週に7日開いています。いろいろなボランティア・センターがあります。大きいセンターは「気仙沼市災害ボランティアセンター」と「気仙沼復興協会（KRA）のボランティア・センター」です。

今まで、全部で58,000人のボランティアが気仙沼に来ました。52,000人は気仙沼市災害ボランティアセンターで、4,000人KRAで、2,000人は、ほかのNPOでボランティア活動をしました。

私たちはKRAのボランティア・センターに志願しました。まず、スタッフはNPOの機構について教えてくださいました。



気仙沼市民がたくさん失職したので、KRA はもっぱら気仙沼市民の失業者を雇い入れています。そして、現地での新しい職場を作っています。たとえば、現在はあたらしいごみ焼却施設を建てています。

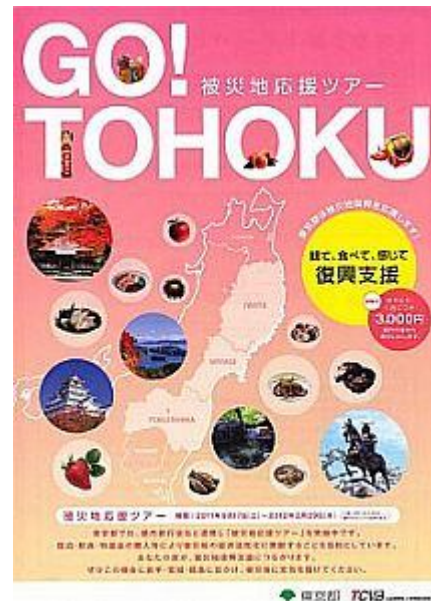
スタッフは我々に浜の清掃を分担しました。海岸もゴミで汚染されているので、海沿いの観光資源も見るも嘆かわしい状況となっていました。



今日は我々は「小泉海岸」で、次の日は「大谷海岸」で海水浴場を清掃しました。

東日本大震災前は、東北では観光事業が大切な産業部門でした。観光流動の回復に寄与することを目的に、「GO! TOHOKU」というキャンペーンが2011年に起こされました。

残念ながら惨害によって、たくさんの浜に立ち入ることがとても危険でした。がれきや倒れた木、船の残骸などが散らばっています。観光事業の再興ために、環境省はいろいろな浜を選定しました。現在、数ある浜の中で「小泉海岸海水浴場」や「大谷海岸海水浴場」などで海岸の清掃作業が行われています。



その上困ったことには、大地震が地盤沈下をひき起こしました。大地震後、広い元の浜は水没しています。そして、地盤沈下のために、冠水の危険が悪化しています。また、背地がほとんど無防備で次の津波の危険にさらされています。小泉海岸では、土地が70～100センチ沈下したので、林は海中に沈んで、海に面していたホテルが水面から突き出ています。



浜ではガラス、メタル、プラスチック、木、貝などを拾い集めて、正しいゴミの分別とリサイクルのために積み上げていろいろな山にしていました。



私たちは短い時間で広い面積を掃除することができました。それにはほんとうに驚きました。



7人のボランティアでは大きな根株を砂浜から抜きとれませんが、20人ではそれをやり遂げることができました。大勢の人が一緒に働けば、すぐに仕事は片付いてしまいます。

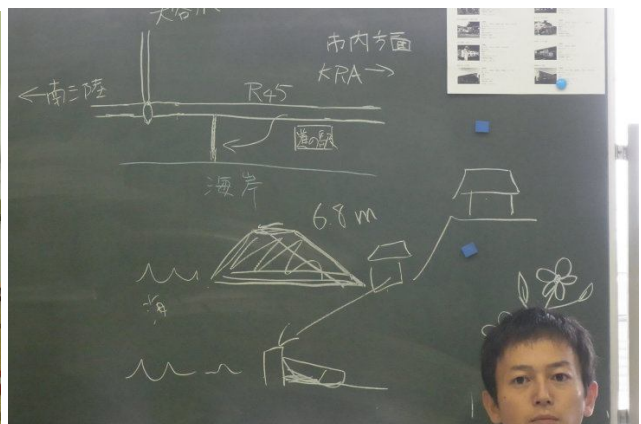




小泉海岸海、仕事を済ませた後、グループの写真を撮りました

10月16日（火曜日）

今日は、気仙沼にあるKRAのボランティア・センターに行きました。もう一度浜を掃除しました。仕事場は大谷海岸海水浴場です。
その前に、スタッフがセンターの中で 大谷海岸の現状を教えてくださいました。再興と護岸に随伴する懸案の諸問題についてです。大谷海岸海は代表的な例です。何よりも、高い防潮堤が活発な討論の対象となったそうです。



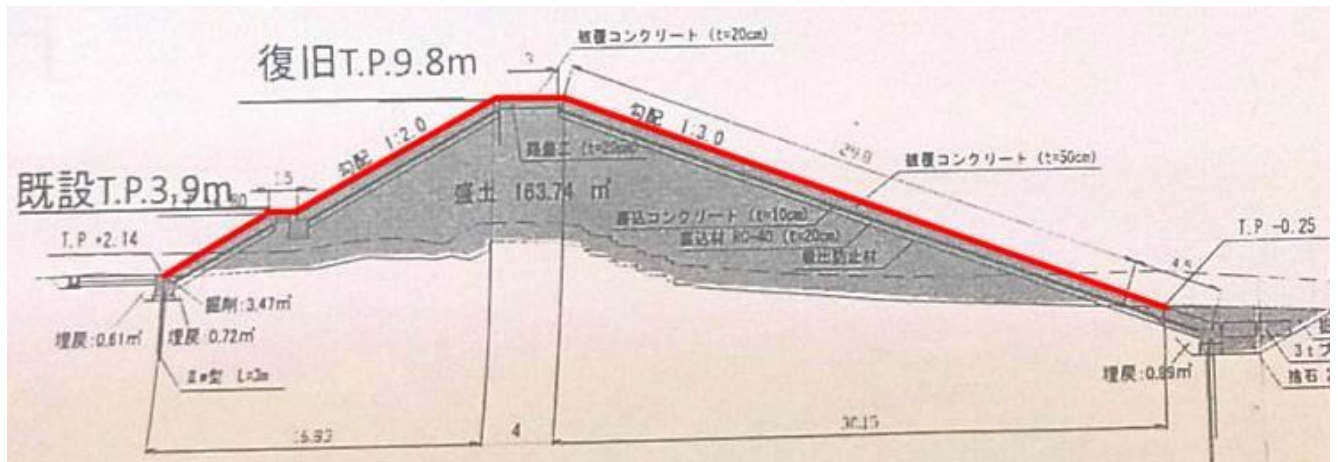
KRAのボランティア・センターの会議室

大谷海岸は2011年3月11日に高さの23メートルの津波で全滅しました。
海岸と平行に走っていた鉄道路線や駅、たくさんの建物も破壊されました。



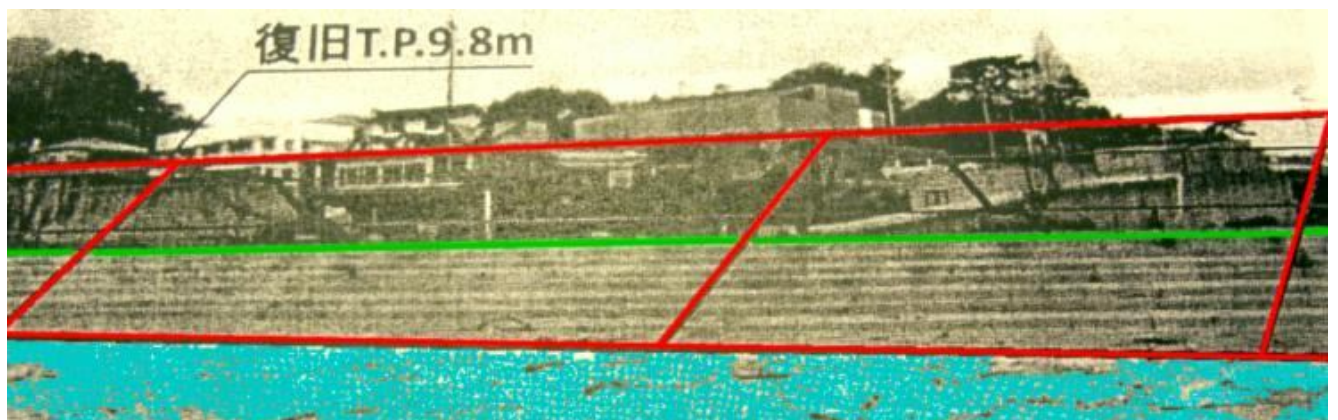
写真は鉄道路線の上手にあるホテルから撮りました。小高い所にあるので、ホテルは津波を免れました。

未来の津波被害を予防するために、国は長さ700メートル、高さ9.8メートルと幅50メートルほどの防潮堤を建てる予定です。



しかし、たくさんの地域住民がその計画に疑問を持っています。特に、漁師と観光で、生活する人々は徹底的に反対しています。

下の絵で、計画した防潮堤を赤い線で、現在の状況が緑の線で書きました。



この合成写真から、新しい防潮堤の高さでは、将来は眺めのいい村にはなりそうもありません。防潮堤の陰に隠れて海は家から見えなくなります。漁師の意見では、彼らは、家から海をどんな時にも観察しなければなりません。それしないと、漁業することがほとんど不可能になってしまうからです。

明らかに、大谷海岸の魅力は海水浴場の美しさにあります。今まで、大谷のホテルや民宿からは、海の見事な景色が見渡せました。窓からは海が見えないと、観光者はどこか別のところに休暇を過ごしに出かけてしまうかもしれません。

大谷海岸を例に、全域に関する問題がわかります。巨大な防潮堤を用いての水防と自然と調和した住環境の快適性は、矛盾しているのです。

たくさんの地域住民は「日本の海岸の美を宝物のように大切にするんだ」と言いました。問題解決の手がかりを見いだすことは、ほんとうに難しいです。

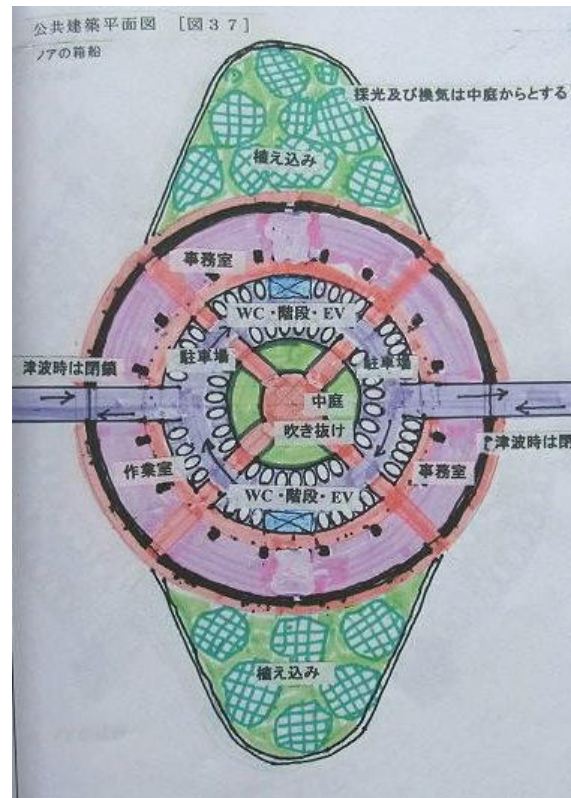
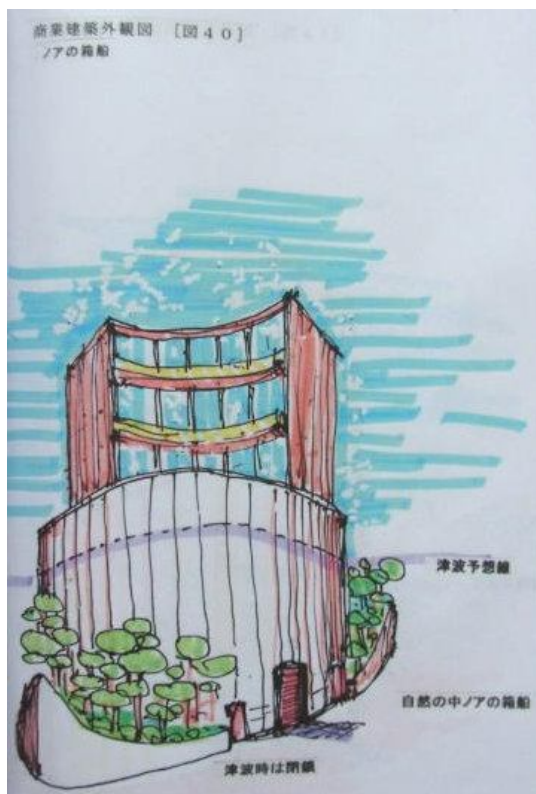
現在、たくさんの建築家と都市プランナーがこのテーマに関して、別の面から取り組んでいます。専門家たちは一対一の安全保障が全く存在しないという点で一致しています。しかし、最も危険にさらされている沿岸域では適切な防止策を取ると、多くの人命を救うことができます。たとえば、変更された土地利用方針図に基づいて、公共施設（学校、市役所など）と住宅地区も、もしも可能ならば高台へ移らなければなりません。それに、建築上の新しい着想も技術開発も大変重要です。たとえば、浮上式防波堤が考案されています（通常時、上部鋼管は海底面下に格納され、津波来襲時にのみ上部鋼管が浮上します）。そして、ある程度まで津波に対して安全な建物（多機能の建物、住宅群など）についての考えを繰り広げられています。

耐津波用の建物について、絆・メンバーの中村知二さんもさまざまな可能性を探しています。そして、護岸について、効果的な消波ブロックを考察しています（海面下うねり消しブロックの配置）。

彼はその思いを「ネオローラル」というパンフレットに書きました。



下の図は中村知二さんのパンフレットからです。安全面で装備した商業建築です。



ちなみに、絆・メンバーの鈴木比さんと板野さんがベルリン工科大学で卒業論文で、被害地の復興との関連で多機能の建物について研究しています。

現在、大谷海岸海水浴場では 後背地を仮堤防で海水から守っています。黒いトンパックをたくさん積み重ねています。そのパックには、被害地からのがれきが入っています。仮堤防は今までの防波堤の半分の高さです。



午前、私たちは仮堤防の前にある海水浴場を掃除していました。その少しまえに、ほかの240人のボランティアもここで働きましたので、最後の掃除でした。

午後の仕事は海水浴場の後ろにある「はまなす公園」で雑草を抜くことでした。



ちなみに、公園の上にあるホテルは海に面した挙式会場があります。大災害の前は、そのホテルでたくさんの方が結婚式を挙げました。

地域住民はたくさんの方が復興後に、休暇を海岸で過ごすことを望んでいます。

午前、大半のグループはまた公園を掃除しました。私は一部のボランティアと一緒に二台の車で陸前高田を経て大船渡赤碕町に行きました。J・F・ケネディー小学校へのレポートのために、私は破壊された赤崎小学校の写真を撮らなければなりませんでした。

途中でたくさんあるうちの一つのリサイクル施設を視察しました。大量の瓦礫はそのリサイクル所に集められ、可燃物や鉄くず、石くず、砂れきなどに分類されています。可能な災害廃棄物を再利用しています。



たとえば、石くずを道路建設の資材に、木くずを建設材料や燃料などに変えています。



がれきの中にはいろいろな用途があることが次第に知られてきました。たとえば、木くずを製紙業で再利用できるように、東北大学が新しい方法を開発しました。

岩手大学は建物会社と共同して、木繊維板を製作することに同じ原料を使っています。繊維板の用途は広いです。たとえば、去年、仮設住宅がその板で建てられました。



ご覧の通り、災害廃棄物のリサイクリングは急速な発達を遂げています。リサイクリングの道を歩んで、日本は本当に急速な進歩をしています。

国際連合によると、日本のリサイクリング・システムは模範的だそうです。立派な効果なので、UNはそのシステムを模範し、世界中に採り入れるようと検討しています。

10月17日（水曜日）

今日、陸前高田に行って、ボランティア活動をしました。津波で最大の被害を受けた陸前高田市は、1554人が亡くなってしまいました。

まだ304人が行方不明です。住民の7.7%が亡くなりました。本当に恐ろしいことです。

町の80パーセントが高さ15～17mの津波で水浸しになりました。壊れた家屋は3341戸です。

大災害の1年半後に陸前高田は今まで恐怖の情景です。壊滅した町を見ると、惨事の全容が私の心に焼き付けられます。巨大な被害に、深い悲しみをおぼえました。

市内を通ると破壊されなかった家は全くありません。全壊された家の土台に雑草が生い茂っています。しかし、見渡す限りたくさんの半壊のコンクリート建築物がまだあります。



都市のはずれでは、津波は5階建てのアパートの4階まで到達しました。5階だけが被害を免れました。

大船渡とは対照的にもっとも復興が遅れているので、ボランティアがとても必要です。またボランティアの数を聞きましたが、陸前高田は平日でも50名から100名、週末は300名以上も参加しています。大船渡では週末でも20人ほどです。

だから、陸前高田のボランティアセンターは活気に溢れています。駐車場では、いろいろな日本の町から来たバスがたくさんあります。

はじめて来たボランティアの人々が受け付けでエントリーして、名前や参加者の数などを教えて、場合によってはボランティア・保険に入ります。そして、スタッフはボランティアに仕事を与えます。



私たちは仕事場のアドレスとXの印のついた市街図を渡されました。その後、道具場で、道具を借りました。用紙に記入した道具は返却したときチェックしました。ボランティアは仕事場に案内なしで行かなければなりません。私たちにはオリエンテーションは難しかったです。

大災害前に作られたものなので、ほとんどの市街図に書き入れた建物は全滅していました。私たちの仕事場は被害にあった市庁舎の近くにあります。

1960年5月チリ地震では、近くにある大船渡市に比べて陸前高田市の被害は、小さかったということでした。

陸前高田は死者は8名でしたが、大船渡市は死者は53名でした。被害を受けた建物の数も大船渡と比べると少なかったです。陸前高田は住家全壊・流失は383棟で、陸前高田は155棟でした。

大被害だったので、大船渡では陸前高田に対したくさんの公共施設が小高い所に新築されました。しかし、2011年に津波は別の方向からフィヨルド性のリアス式海岸へ打ち寄せて、備えのない陸前高田のインフラストラクチャーを全滅させました。

10月まで市庁舎内は3月11日のままの状態にされていました。正面玄関には花輪やお線香がおかれていました（11月に市庁舎は取り壊されました）。ここでたくさんのボランティアはお祈りしました。二人の絆メンバーもお経を上げて、全員が黙祷し、哀悼の意を表しました。ドイツ人は無言で祈りを捧げました。



祈りの後で、20人の絆・メンバーは側溝を掃除しました。5時間で60メートルの側溝が掃除することができました。

仕事をすませた後で、ボランティアセンターで道具を返して、報告をしました。スタッフは「依頼を果たしたか。特別な出来事がありましたか。」と聞きました。でも、仕事中特別は出来事はありませんでした。

陸前高田のボランティアセンターは会社のように迅速かつ効率的に働いています。



午後に、私たちは陸前高田のはずれにある「みんなの家」というプロジェクトを視察しました。「みんなの家」は有名な建築家の伊東豊雄さんの立案で、若い建築家と共同で建てられています。木造2階建て、建築面積は約30平方メートル、高さ約10メートル。津波の塩害で立ち枯れになったスギ19本を柱に使っています。最上部の物見台からは被災地を一望できるようにしてあります。



プロジェクトの根本理念は、都市の住民が自分の責任で市の発展に参画しています。寄付金・資材・機材等の提供で、住人はボランティアと一緒に、建築家・グループの指導のもとに「みんなの家」を建てています。自助の例となるために、2012年11月に、第13回ベネチア・ビエンナーレ国際建築展では、「みんなの家」の模型や、陸前高田市出身の写真家、畠山直哉さんが撮影した被災地のパノラマ写真が展示されました。

10月18日（木曜日）

午前、大船渡市役所に行き、市長の戸田公明氏とこの一年半で3度目の会見しました（最初の会見は2011年9月、二度目は2012年4月でした）。



2011年7月に新しい大船渡地区の土地利用方針図が出来ました。私は「第2回ボランティア活動報告」に詳しく報告しました。新しい「津波線」から見て、海側には絶対に人間が住んではいけません。しかし、職場としては低地でも可能です。

今はもう150の復興プロジェクトがあります。予定は10年間のうちの復興だそうです。本当に野心があると思います。10パーセントのプロジェクトは実施されて、66パーセントは着手されて、16パーセントは計画中であります。

5515所帯は建物被害を被り、全壊は2784棟、半壊は717棟の家です。約1500棟の建物が再建されなければなりません。650棟の家が小高い所で建てられています。

一度目の重点は住宅急造計画です。そのために、20カ所の小高い市街化区域が予定です。国公立の地所また私立の地所です。

一切を失った市民は1000万円（約10万ユーロ）の財政補助を受けています。

仮設住宅住人に欲求と要望を短い間隔おいて尋ねています。コミュニティーセンターが建てられています。そして、隣町と共同して、いろいろなプロジェクトを催しています。

二度目の重点は産業の復興です。新しい職場を作ることが最も重要です。

水防について、二つの防波堤を建てることが予定されています。震災で全壊した大船渡港の湾口防波堤が国家の資金で復旧されています（2012年6月に、大船渡市漁協はその国の防波堤復旧工事を承諾することを賛成多数で決めました）。現在、湾口防波堤は工事中で、2015年度内の完成を目指します。そして、岸辺に高さは5メートルの防潮堤が市の資金で建てられます。

鉄道線について、今は、まだ検討中です。鉄道用築堤の高さが海抜5メートル以上だそうです。しかし、具体的な計画はありません。

いつか、鉄道線が復旧することになれば、鉄道会社と隣町（陸前高田と気仙沼）と一緒にたくさんの交渉が必要です。

参考に、たくさんの資料を渡してくれました。そして、日独の生徒の交換について、今、大船渡市の担当者がいます。

絆・メンバーの建築の学生には市役所に行った甲斐がありました。二人は大船渡地区と陸前高田地区の土地利用方針図をもらいました。

お昼ごろに長洞仮設住宅をまた訪問して、居住者に「友の会」から手作りの暖かい毛布を差し上げました。



「友の会」はベルリンに住んで日本女性のグループです。「絆・ベルリン」に繋がるグループですが、自主的に活動し、必要な場合には協力し合います。たとえば、2012年の日独センターで催された「3・11復興祈念の集い」では大きなバザーを行い、その売り上げを宮城県の中学校に寄付をしました。

その日の昼食に、仮設住宅の居住者は私たちに美味しい焼きサンマをごちそうしてくれました。食後、近くにある菜園ではしご段を作るのを手伝ってくれました。



菜園の建設はNPO「チャイルド・フренд」が経済的に援助しました。NPOは肥料や種子、商売道具を買いました。今頃はもう、菜園は採算がとれていると思います。居住者が仮設住宅を一軒ごとに回って歩き、じゃがいもやキュウリ、トマトを売っています。2013年から新しい公民館のテラスでも野菜を売り出すつもりです。

菜園では20人の居住者が働いています。それは主として職のない年配者です。2012年4月から、菜園の土地が大船渡市から賃借されています。

今日、建てられたはしご段は 近隣の幼稚園への庭の道の一部です。

その仕事を終わって直ちに福祉の里センターに戻り、お別れ会の準備をしました。

6か月前と同じ場所に、NPO遠野まごころネットのメンバーや長洞仮設住宅の居住者、大船渡に住んでいる支援者などが絆・ベルリンの招待で来ました。挨拶後に、皆と一緒に乾杯の音頭を取りました。食べながら、歓談しました。最後は、皆で輪になって合唱しました。



お別れ会の間に、大槌市から来たNPO遠野まごころネットの臼澤さんと NPO吉里吉里苦にの芳賀さんは「絆森プロジェクト」と呼ばれて新しい植樹プロジェクトについて報知しました。大槌市の近くにある山の中に「ドロの木」を植える予定です。

津波で、郷土芸能の面や衣装、楽器の多くも失われました。鹿子踊りや能楽、歌舞伎などの仮面もたくさん壊されました。

日本人は古来、仮面の白い頭髪を外界と触れあう“心のアンテナ”と考えてきました。

その白い頭髪は「カンナガラ」と呼ばれ、「ドロの木」という種の木から作られます。



約400年前から吉里吉里の後背地では住民が「ドロの木」の木皮を削って、「カナガラ」を使ってきました。吉里吉里の最盛期では、大商人は京都や大阪、江戸などと盛んに交易をして、珍しい「カナガラ」も売ったそうです。しかし、現在、東北では、コミュニティの心を守るこの大切な木が絶滅寸前であります。被害地で、住民たちはこの貴重なドロの木の森を育てていきたいのです。被災した人々には郷土芸能は大切な頼みの綱です。

収穫できるまでに成熟期間が50年なので、長期計画です。とても高価なので、未来の財源になると思います。希望の種です。

同時に、波及効果として、森林保全、生態環境再生、水源の涵養に寄与することも期待されます。



1万平方メートルの所在地は大槌町の近くにある小槌地区にあります（大槌町より町有地の無償提供予定）。

「絆森」はもっと大きな基本計画の中心部です。基本計画は収益事業と観光事業のプロジェクトを包含しています。

収益事業として、「カナガラ」エコ・ビジネスを立ち上げる予定です。たとえば、「カナガラ」も、「絆森」の関連商品（木工品、梱包材、薪、キャラクターグッズなど）を製造する予定です。

観光事業の復興ために、ハイキングコース、自然歩道、公園、果樹園、山小屋などを作る予定です。

大変なプロジェクトなので、絆・ベルリンはドイツからの支持についての可能性を探すつもりです。



10月19日（金曜日）

朝食後にグループは解散しました。朝早く、みんなと別れました。8人の絆・メンバーたちは福島県を経て東京方向に向かいました。今日は彼らは被害にあった南三陸町を見に行きました。一部のメンバーたち大船渡に残りました。グッチョウさんは遠野と上長部に行き、新しい公民館で仕事じまいしました。

10月20日（土曜日）

東京に帰る途中で、8人の絆・メンバーたちは福島第一原発の近くにある「希望の牧場」を訪問しました。妻と私は大船渡に残ったので、これから以下に福澤啓臣先生の報告を挿入しました。鶴岡 邦夫さんが次の写真を撮りました。

希望の牧場

著者：福澤啓臣

写真：鶴岡 邦夫

今回の活動で最も印象深かったのは「希望の牧場」訪問であった。「希望の牧場」は福島の警戒区域にある浪江町の酪農家の吉沢さんが中心になって自分の牛たちを屠殺しろとの政府の指示に逆らって、現在800頭の黒和牛を生かしている農場（福島第一原発から14kmの地点）である。

そのことをドイツで知ってできれば訪問したいと思い、いろいろ調べてみたら、警戒区域なので普通ではとても入れないとのことであった。だがあきらめきれず、とにかく行けるところまで行ってみようと思い仲間8人と3台の車で浪江町に向かった。ところが、吉沢さんの連絡先に電話し、些少だが義援金もお渡ししたいと言うともう一人常駐の針谷さんがとにかく来てみてくれとのことだったので、入り口まで行ってみた。到着すると岐阜県の機動隊員が3人いたが、聞いてみると、いや入れますよとのこと。



いや、壮観であった。牧草を食む200頭の黒牛の群れ。針谷さんの話を聞きながら、牧場内を案内してもらった。針谷さんは酪農家でもなく、お百姓でもない。ルポライターだが、吉沢さんと接するうちにのっぴきなくなり、牧場に入ってしまったのだそうだ。健康状態はお聞きすると、もう2000シーベルトぐらい浴びているのではとのこと。そして自問自答する毎日だとのこと。売れない牛、それも本来ならいつかは売られ、食肉になってしまうはずだった牛、放射能を浴びていつかは死んでしまう牛の面倒を見ているのは何のためだと。牛の寿命は普通20年ほどなので、いつかはなくなる。

ぼくも理解しようとして考えついたのは、牛たちに生命を感じてしまったのではないだろうかということだ。いくら放射能を浴びて、役に立たない牛でも生きているのだ。殺せない、できるだけ長く生かしたいというのは自然な心の流れだ。訪問後一緒に訪問したドイツ人と話したが、印象深かったけど同意できないとの意見だった。人間中心主義的なキリスト教の考えからすれば、役に立たない動物のために人間である自分の命を投げ出すのは、納得いかないだろう。仏教的な観点からすれば、生き物はすべて平等だ。



希望の牧場から見た福島第一原発の煙路の眺



希望の牧場： 放射能で汚染され牛

だから、動物でも生き物として受け入れたら、自分（人間）の命を犠牲にしても長生きさせようとするだろう。そしてそれに共感できるだろう。訪問後の仲間の話では針谷さんにご家族のことを聞いたところ、奥様とお嬢さん一人がいらっしゃるそう。それならば、余計にドイツ人には受け入れられないだろう。日本人の僕にも家族に対しての責任があるのでは考えながら、心のほんのちょっぴりした隙間でなんとなく受け入れているのが感じられた。僕が同じ立場だったら、逃げてしまっていたらと思うられるが。

レジュメ

総括して言えば、被害地ではどちらを向いても大きな仕事が行われていますが、目標に合致した援助がまだ数年間先まで必要だということです。

瓦礫がすべて撤去された後、インフラストラクチャーと建物の復興だけでなく、コミュニティの復活も大事です。これは行政措置で処理することはできません。コミュニティの復活は被災した人々や NPO、ボランティアなどと一緒に改造していきます。

NPO 遠野まごころネットの及川 龍哉さんが「Word 祈り」という詩で人々の感情も彼らの見通しも表現していると思います。

Words – 祈り

Words

言葉が冷え
薄れゆく前に

何ができるだろう
悲しむ海辺の君に

... more than words

静かでも
強いところで

Stay with you

それが私の願い

Words

誰もが時の
岸辺の貝殻

鮮やかな色は
褪せて消えゆくけど

... more than words

以前(まえ)よりも
確かな歩みを

Pray with you

同じ未来(あす)への祈り

ボランティア活動中で、私たちは継続的な支援が役立つと聞かされています。被災した人々も NPO のスタッフも「連続が気力を与える」と言いました。ですから、絆・ベルリンは 2013 年も活動を続けます。

Frank Brose

ベルリン、 2013 年 2 月

ヨーロッパに住んでいる絆のメンバーたち

Frank Beyer	元会社マネジャー	ドイツ人
Dr. Frank Brose	地質学者	ドイツ人
Dr. 福沢啓臣	元日本学先生（ベルリン自由大）	日本人
板野唱子	建築学院生（ベルリン工科大）	日本人
Brigitte Jogschies-Brose	ソーシャルワーカー	ドイツ人
小林亜未	教育学学生（フンボルト大学ベルリン）	日本人
Jana Riedel	教育学学生（フンボルト大学ベルリン）	ドイツ人
Klaus Rupprecht	翻訳家	ドイツ人
Axel Rohde	建築家	ドイツ人
鈴木比呂夢	建築学院生（ベルリン工科大）	日本人
Dr.山田ボヒネック頼子	日本語講師（ベルリン日独センター）	日本人

日本に住んでいる絆のメンバーたち

廣瀬芙美子	元職員、年金生活者	日本人
鶴岡邦夫	会社員	日本人
村松庄次郎	元会社員、年金生活者	日本人
村瀬靖昌	翻訳家	日本人
Jörg Gutschow	建築家	ドイツ人
大山紀子	主婦	日本人
戸谷美津子	フリーライター	日本人
富樫美津子	元学校教師、年金生活者	日本人
鈴木薫	講談社編集者	日本人
小林寿恵	学校事務員	日本人
矢崎栄司	編集者	日本人
中村知二	建築家、アーティスト	日本人
山田潤二	建築家	日本人
宮川好子	主婦	日本人
嵐波朗	店員	日本人

大船渡に住んでいる

今野みつこ	介護・ソーシャルワーカー	日本人
今野定志	民生委員、年金者	日本人
遠藤章	技術者	日本人
新沼聡	現在は無職	日本人